

け、多くの村、川、滝、水田の側を通り、大分へと続き、そこからさらに別府まで延びていた。海岸沿いの活気ある両都市は互に電車により結ばれている。

別府の近郊に温泉で有名な小さな湯治場の鉄輪^{かんなわ}がある。これはそこから遠くないある山のふもとに湧き出、俗に「地獄」と呼ばれるいくつもの池をなしている。これらの池のあるものは相当に大きく、人々が自殺する目的でそこにとび込むという例は珍らしくないそうである。もちろん彼らは煮えたぎるような熱湯の中ですぐ死んでしまう。――管を通して湯は鉄輪に運ばれているが、そこにはいくつもすばらしい設備の湯屋や蒸風呂がある。――私は家々の前の地中にぐつぐつ煮え立っている鍋が置いてあるを見た。そして、その一つを持ち上げてみると、驚いたことに家々の前に引いてきた熱湯がかまどの代わりにしているのに気づいた。日本の主婦たちはこの点で我が国の主婦たちよりずっと快的な生活をしている。

私はさらに別府から北へ向かって中津まで旅し、そこから何とも魅力的な耶馬溪へ日帰り旅行をした後、陸蒸気^{おか}に乗り、小倉を経由して長崎へ戻った。

独語学者としての高木敏雄



高木敏雄

高木敏雄（1876-1922）は我が国における神話学の開拓者として知られており、恐らくその功績は不朽であろう。だが一面彼は不屈の独語学者であり、生活を支えたのは主として独語教師としての収入であった。神話学者としての高木については、大林太良、大塚正文その他による研究があるが、独語学者としての側面に光りを当てたものは皆無である。彼の神話学はドイツ書の影響を強く受けていることを考えると、彼がドイツ語を学んだ意義は大きい。

高木は、1890年（明治23）9月、第五高等中学校予科補充一級に入学した。彼のドイツ語の基礎はこの五高時代に作られたと見てよい。

明治27年の大学予科時代は第一外国語独語、第二外国語英語で志望学科は史学であったが、同28年には独逸文学に変えた。文科生徒19名中、席次は2番であった。

1896年（明治29）7月五高卒業後、直ちに帝国大学文科大学独逸文学科入学、カール・フローレンツ教師の薫陶を受けた。同級に武内大造、一級上に菅野養助、二級上に小島伊佐美、一級下に片山正雄（孤村）がいた。この時代から神話学の論文を帝国文学に発表した。これには、師のフローレンツが古事記や日本書紀を中心とする日本の古代文学の専門家であったので、その感化もあったのではないかと思う。また、フローレンツは独文科の学生に対し、卒論は日本文学に関するテーマを選び、それをドイツ語で書くことを求めた。

高木は明治33年大学卒業と同時に母校五高の独語教授に就任した。彼は大変厳しい教師であったようだ。生徒の叱り方、鍛え方の激しさでは英語の厨川白村と独語の高木が双璧であった（『龍南』開校五十年記念特輯号、昭和12年10月）。花田大五郎は『五高時代の思出』の中で次のように述懐している。

「二年では高木敏雄先生、オットーの文典、エンゲリンの第二読本などが教科書であったと記憶しますが、高木先生には一同鍛はれました。その頃『都々逸』の替歌に『独逸は下手でも都々逸は上手、今日も高木さんにほめられた』というのがありました、これは正に独逸語に悲鳴をあげたのです。」

五高時代は雑誌部の部長を務めたこともあり『龍南会雑誌』に度々執筆している。それは彼がまだ五高生であった明治26年から五高教授を辞める前年の明治39年まで計30回、18篇に及んでいる。だが内容的には殆どが歴史・文学・民俗に関するもので、語学論文は書いていない。ただその中で、第116号（明治39年11月）に発表した「学生々活の一面（宿舍問題の研究）」は、徹底した質素な生活を求めたもので、その論調の激しさに驚かされる。だがこの高木の性格的な激しさ、狷介は、彼を不幸にすることになる。『龍南人物展望』にも「教授時代は負けん気の、豪傑肌で、生徒を罵倒すること天下無類、教授団のうちでも最も変りもので、圭角のありすぎる人物であった」とある。

五高教授時代の高木は教室でドイツ語を講義する以外は、専門の神話や説話の研究に没頭していたと考えられる。名著の誉れ高い『比較神話学』（明治37年）もこの時期出版された。「凡例」には参考文献として多数のドイツ書が挙げられている。

明治39年4月に独語研究の文部省留学生の候補に挙げられ、推薦書が作成されたが、実現していない。理由は次に述べる事件と関係があるのはほぼ間違いない。

高木は明治40年1月24日付で「文官分限令第十一條第一項第四号」により休職を命じられた。大塚正文「高木敏雄」（『熊本県近代文化功労者』所収）によると、明治39年の栗野事件（栗野昇太郎の一高転校問題）と入学試験問題（左足の不自由な生徒を不合格にした問題）で、持ち前の正義感からこれに反対したためだという。

高木の休職処分は五高生を驚かせた。『龍南会雑誌』第119号（明治40年月日不詳）の雑報欄「高木先生を送る」に次のようにある。

「高木先生突如として校を去る。其去るは去れるに非ずして去らしめられたる也。先生焉ぞ自ら進みて吾人を棄て去るの無情を敢てせむや。先生の休職は吾人に於て青天の霹靂たりしが如く、休職の辞令は先生に於ても全く寝耳に水たりし也。（中略）たゞ吾人は五高の一生徒として独逸語の最良教授を失へるを悲しみ、龍南会の一員として雑誌部の絶好部長を失へるを悲しむ。」

その後嘉納治五郎に招かれて高等師範学校講師（のち教授）となったが、人柄が円満ではないので、ここでも長続きはしなかった。だがそれはともかく、この東京時代は、生活上の必要に迫られたせいか、盛んな著作活動が見られた。童話集や説話集の刊行と、その研究書を次々と世に問うたが、独語関係のものも漸く現れた。恐らくその最初がクライスト没後百年記念として読売新聞（明治44年11月12日付）に寄稿した「詩人の晩年」と題するもので、クライストが晩年主宰した文芸誌『太陽』の挫折の顛末を書いた。だが、高木の独語学者としての特色が窺えるのは、1912年（明治45）4月から10月まで『医家独逸語雑誌』（吐鳳堂）に連載した「文法講話」であろう。高木は「緒言」において、

「文法講話は学校教科書の順序に従った乾燥無味な、形式的な文法講義ではなく、順序と形式との拘束を全然脱した、適切なる講話の連続である。独逸の学校生徒に読ませる為に独逸の

学者實際家が綴った文法書やうな、小理屈ばった、形式的な、人を飽かせる講釈とは違って、多年の間日本の学校に於て独逸語を教授した経験を有する日本人が、日本人の為に必要と思ふことを思出すまに話をするのであるから、前者と後者との間には、少なくとも身体に合はぬ出来合の洋服を着た時の不快な心持と、寸法を取らせて仕立させた洋服を着た時の愉快な心持との間の相違に近い位の差別がある筈である。」

と述べ、普通の文法講話とは異なることを強調し、強い自信を示している。

日本人が独語を学ぶ目的は「読む・書く・話す」ことにあるが、特に「読む」こと即ちドイツ語を理解することが第一の目的だ。書くこと、話すことも必要には違いないが、これは自分の意志を相手に曲がりなりにも先方へ通じさえすれば、どうにか我慢できる。だが、書かれ且つ話されたドイツ語を理解することはどうしても十分でなくてはならぬ。少しでも不十分なところがあると、そのため非常な不便を感じ、不利益を受ける。この不便と不利益を完全に除去し、少なくとも軽減するためには、種々方法があるが、文法の知識の足りない点を補うこともその一つだとして高木は「文法講話」を始めている。

高木によると、ドイツで行われている現在の文法教科書は、元来ラテン語文典の系統を引いているので、随分理屈に合わぬ説明があり、日本人の眼から見ると実に滑稽なことがある。日本で独語を教える学校でもやはりこの方法に従っており、日本人の手に成った多くの文法書もこの慣例を踏襲している。だから今日普通に行われている文法書はドイツ式文典としては十分であっても、日本人用としては多くは不完全だという。日本語とドイツ語は根本から異なるので、またドイツ人は生まれながらにドイツ語を知っているが、日本人は大体中学校を卒業後、初めてこれを学ぶので、ドイツの子供でも分かりきったことが我々には理解が困難であったりする。高木はそうした例として、日本語には関係代名詞がないが、理屈で推して理解する、それで *eine Krankheitserscheinung, welche nur in Folge der Lebererkrankung vorkommt* とあれば誰も解し得ぬ者はないが、これと殆ど同じようなことを *eine Krankheitserscheinung, wie sie nur in Folge der Lebererkrankung vorkommt* と云うと、もう分からない者が何人もいることを挙げる。これらは「肝臓疾患の結果としてのみ発する疾病現象」「肝臓疾患の結果としてのみ発する如き疾病現象」の意で、言い方には相違があるが、内容には殆ど何らの差がないとして、高木は両者の関係を次のように説明する。

「つまり関係代名詞 *welche* の代りに普通の人称代名詞を用ひて、接続詞 *wie* を以て『コンマ』の前後の文章を従属的に連結すると、関係代名詞のみを用ひたる時と殆んど同一の意味に成るので、*wie* + 人称代名詞 = 関係代名詞の式で示すことが出来る。」

次いで *eine Krankheitserscheinung* の *eine* は何かと云うと、日本語の「一種の」に当たる語で、次にくる関係文によって説明されるのが普通である。従ってこの *eine* は数詞でもなく、不定冠詞でもなく、一種特別な用法と意義を有する詞である。こういうことはドイツの文法書には書いてないが、日本人には必要だ。冠詞だからと簡単に考えると、大変な誤解を生じる。

以上で「緒言」が終わり、次に本講に移り先ず「比較及び比較法」について講話を進める。

日本語の形容詞には比較級という形がないので、比較を示すためには「よりも」とか「最も」とか「稍」などを形容詞の前に付けねばならない。それでドイツ語の比較級の形を見て、便利で、都合よく出来ていると思いがちだが、実際、独文を日本語に訳してみると、なかなかうま

く行かぬ、特に日本語を独語に訳す時は一層困難である。両国語の比較級の作り方が非常に異なっているのは、日本人にとってドイツ語が難しい大きな原因の一つであると高木は考える。

「原級は比較級より低く、比較級は何時も比較をしたものだと思ふと間違である。原級の方が却て比較級より高く、場合によると最高級よりも高いことが屢々ある。何故かと云ふと、一定の物と物を比較する場合の比較級と最高級とは、要するに比較せらるべき物に対して大であると云ふに過ぎないので、絶対的に考へると、果して大であるや否やは疑問である。之に反して原級は無比較級であるから、或場合に於て事実上の最高級を示すことがある。原級比較級最高級の三級を通じて、相対と絶対との二種類がある。」

と述べ、例文を挙げてゐる。Er läuft so schnell wie der Hund. と Er machte so gut, als er konnte. について、so schnell と云つても決して早いのもなく、so gut と云つても決して巧いのではない。唯其れだけである、と説く。そして最もよい例として挙げたものは明快だ。

「alt は年齢を示す形容詞としては決して『老』の意味はない、30 Jahre alt と云へば三十歳のことで、3 Monate alt と云へば生まれてから九十日のことである。Wie alt sind Sie? と云へば、年齢は幾歳かと云ふことで、決して如何程老いたりやと云ふことではない。併し ein alter Mann と云へば必ず老人のことで、六、七十歳以上でなくては使へない。此が相対と絶対との区別である。」

次の「接続詞の話」では、接続詞の概念と定義を詳細に述べ、表にして分類して見せる。その後で一つ一つの接続詞について用法を詳しく説明する。それで und について説明するにも懇切で且つ説得力がある。例えば Dieser Patient muß noch heute behandelt werden, und wenn er auch infolgedessen sterben sollte という文を挙げ、訳文を付し、こう解説する。

「und は独立文章と従属文章（或は主文章と副文章）を結合してゐるから、云ふまでもなく従属的接続詞である。併し und 其ものは其本来の性質上決して従属的接続詞と成り得可きものではない。然らば此 und は何であるかと云ふに、wenn に付着した und である。此 und を削除しても、全体の意味には殆何等の変化も来さない。故に此 und は単独の und でなく、und wenn と結合して許容法の副文章の首に立つ接続詞と見るべきである。」

ともかく「文法講話」は、高木のドイツ語の学殖が並々ならぬことを窺わせるものであり、加えて論述にも独自の工夫がなされおり、推奨に足る。

『医家独逸語雑誌』の次に発表の舞台となったのは、青木昌吉や大津康ら東大独文科出身者を中心として大正3年1月に創刊された『独逸語』（独逸語発行所）である。高度で充実した内容の独語独文学雑誌である。高木はこれに独和对訳、文法記事、和文独訳練習等を寄稿した。対訳としては「北欧神話」（Aus Schmidts Götterhimmel der Germanen）を大正3年2月号（第1巻2号）から9回連載した。ゲルマン神話に関する論文に訳文と詳しい注を添えたもので、いわば専門の神話学を語学に応用した仕事であった。このほかデンマークの童話なども取り上げた。大正3年11月号からは Grammatikalisches と題して「接続詞 als の意義及び使用について」「名詞相互の直接的従属関係」「人称代名詞の使用について」「関係代名詞の用法」等の語学記事を断続的に発表した。和文独訳練習では新聞記事なども取り上げたが、それが困難な理由を次のように説明した。

「日本文を独逸文に訳するのが吾々にとって困難であるのは、両個の国語が全然異った文法

語格を有してゐるからばかりではない。実際の場合に於て、吾々は現時の普通の文章、特に新聞雑誌の文章が不完全乱雑であるために、普通人が想像し得ない程の困難に遭ふのである。(中略) さてそれを訳しやうとして見ると、今日の新聞記者の頭脳が如何に粗雑で、従つてその文章が如何に冗漫であるかと云ふことがわかる。吾々は此の如き文章を吾々の頭の中で完全なものに直して、それからそれを独逸語に直すので、つまり二重の労力をすることになる。」(大正6年5月号より)

そして報知新聞の「激増した職工の怪我」と題する記事を訳しているが、その訳文は見事である。とにかく『独逸語』誌上での高木の仕事はいずれも著者の学殖を示すもので、その的確で、懇切な解説には今読んでも教えられるところが多い。

なお、『独逸語』大正3年7月号の折り込み広告によると、高木は同年7月16日より8月26日まで中央大学(当時、東京市神田区錦町)で行われた「独逸語発行所主催」の夏期講習会の講師を、葉山万次郎、上村清延、向軍治、藤井信吉、青木昌吉、三並良、三浦吉兵衛と共に務めた。

単行書としては独習書兼教科用『独逸語入門』(大正3年)を吐鳳堂及び克誠堂より上梓した。實際を宗とし形式を避け、原文には独逸体・ラテン体両用の文字を併用し、訳文には文章体、口語体、直訳体を用いた。課題には多くの注を加え、文法の説明は漸次粗より細に進み、初習者が困難を感じることなく、知らず知らずのうちに規則を習得できるように、用意周到かつ懇切な講述がなされている。これは当時評判がよく5版を重ねた。

しかし、独語学者としての最大の功績は、ゲーテの『イタリア紀行』を翻訳したことだろう。勿論、本邦初訳だ。大正3年6月隆文館より刊行された『伊太利紀行』(四六判、724頁、挿絵3枚、杉浦非水装丁)がそれである。高木は序文において、こう述べている。

「この紀行の内容は紀行それ自身が物語つてゐるから、別に説明の必要は無い。流石は空前絶後の大詩人の紀行だけあって、旅行の計画、途中の行動、感想、見聞すべてのものが凡俗を超越して、如何にも奇抜であるばかりでなくゲーテ其人の精力の無限に多量であり、趣味の広大であり、知識の無限に豊富であるのに、誰一人として驚かされぬ者はない。この一篇の紀行の価値と、ゲーテを知らんと欲する者は、必ずこれを一読しなければならぬ理由とは、全く茲に存するのである。」

ゲーテは1786年から1年半、ワイマールの生活を逃れて自由に南欧イタリアに遊び、古代芸術や文芸復興期の作品に親しみ、或いは各方面の傑出した人物と交流した。そして明るい自然の風光の中で、詩人として、科学者として、また政治家として知識と興味を素晴らしく披瀝した。『イタリア紀行』はゲーテ自身にとって重大であるだけでなく、ドイツ文学の一転換期に際してこの著作が持つ価値と意義は大きかった。我が国では明治期、木下杢太郎が一高時代にドイツ語の時間に岩元禎から2年間にわたりこの書を習い、深い感化を受けた。彼の作品にはその影響の跡が至るところに指摘されている。

こうした世界的名著が正確な語学の力により、しかも完訳で出た意義は大きい。いつか美術評論家の嘉門安雄がテレビでこの高木訳『伊太利紀行』は若き日の愛読書だったと語っていたが、美術史家やイタリア研究家の中には原文或いは翻訳で『イタリア紀行』を読み、影響を受けた人が結構いるようである。なお、高木訳が出てから11年後(大正14年)には二種の『イタ

リア紀行』がそれぞれ別の版元から岩崎真澄と吹田順助の訳で出た。

さて履歴書によると、高木は大正5年10月東京高等師範学校教授を辞めた後、約6年間の浪人時代を経て、一時松山高等学校の独語科講師を務めたが、大正11年(1922)3月10日付で新設の大阪外国語学校の教授に任命された。校長の中目覚なかのめあきらが彼のドイツ語の実力を見込んで招いたのである。中目は東大独文科の一級上の先輩であり、卒業後ウィーン大学で地理学を学び、地理学者になった人。高木は彼の好意に深く感謝した。

『大阪外国語学校一覧』(自大正十一年至大正十二年)を見ると、高木は独語科主任教授のほか、評議員や教務課長なども務めている。(英語科には以前五高教授だった佐久間信恭がいた。)そして、遅蒔きながらもその年の6月、文部省より独逸語及び語学教授法の研究のため満一年間のドイツ留学を命ぜられた。だが、出発直前の12月18日、腸チブスのために急逝した。享年47。彼の死は我が国の神話学や民俗学のみならず、ドイツ語界にとっても大きな損失であった。

ベルリン東洋語学校教師 菅野養助

明治時代において高等学校の語学教師が官費で留学することは難しく、時期的にも他の分野に比べてかなり遅れた。五高の英語教師夏目漱石と一高の独語教師藤代禎輔が文部省から派遣されてそれぞれ英国と独逸に留学したのが、その最初の例だが、それは漸く1900年(明治33)になって実現した。さて、第七高等学校造士館の初代独語教授であった菅野かんの養助(1874-1918)は留学を強く希望していた。菅野には、独語科主任でもあり年齢からも当然自分が文部省留学生に選ばれるとの期待があった。だがそこへ、1907年(明治40)5月東京外国語学校教授の武内大造が独語教授として赴任して来た。武内は、外語では同僚の田代光雄が留学に出発したばかりで、自分に次の順番が廻ってくるのは遅いので七高を利用したのである。七高赴任に際し留学に関して何らかの約束があったと見てよからう。そうでなければ東京外語教授の地位にある者が、何のゆかりもない鹿児島に赴任することは普通考えられないからだ。いずれにしろそのために菅野はオミットされ、彼の不平と憤懣を買った。このことは二人の同僚であった小池秋草(堅治)が『七高思出集前編』において証言している。武内は留学を終えると東京外語へ戻った。そこで菅野は2年間七高教授を休職し、1908年(明治41)7月自費で渡独した。ベルリンのシャルロテンブルクのウーラント街187番地に下宿した。そして、ベルリン大学付属東洋語学校(Seminar für Orientalische Sprachen)の日本語講師になった。東洋語学校の日本語科にはR・ランゲ教授を中心に、歴代の日本人講師には井上哲次郎、千賀鶴太郎、巖谷小波、辻高衡、市川代治らがいた。菅野は友人の市川に頼んでその後任になったのである。ベルリンのダーレムにあるプロイセン国立公文書館には東洋語学校関連史料が保存されているが、その中に菅野自筆の履歴書や岩崎行親七高校長の推薦状(ともに独文)なども見られる。前者にはこう書かれている。